

ある革命家の回想

川合貞吉



徳間文庫

徳間文庫



かくめい か かいそう
ある革命家の回想

© 1987 Tokue Kawai Printed in Japan

614-1

1987年3月15日 初刷

著者 川合貞吉

発行者 荒井修

発行所 株式会社徳間書店
東京都港区新橋四一〇十二〇五

電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替東京四一四四三九二番

印刷
製本

凸版印刷株式会社

〈編集担当 芦沢孝作〉

ISBN4-19-598253-7 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

ある革命家の回想

川合貞吉



徳間書店

はじめに

マルクスは、十八世紀におけるヨーロッパという極限された地域社会での、フランス革命の挫折の歴史的教訓と、十九世紀前半におけるヘーゲル哲学の理性主義、合理主義の形而上的觀念論への埋没と、フォイエルバッハの唯物論をふまえて、イギリスの経験論哲学などを総合的に吸収し、その觀念論に埋没したヘーゲル哲学を原点として、かれの思想を世界の普遍的真理として形成したのである。のち初期マルクス主義に対する解釈が分裂したのはこうした歴史的條件にもとづいてマルクスが発想した点に原因がある。今日の日本におけるマルクス主義の混乱が、中ソの対立をめぐってふたたびマルクス主義の源流についての再検討を要求しつつあるのもそのためである。

マルクス主義の核心ともいべきものは、衆知のように生産様式の問題である。すべての実在に内包する矛盾が、人類社会では歴史の進歩の過程で生産関係の矛盾の弁証法的発展として現われる。マルクスはフランス革命の教訓とヘーゲル哲学を通じて、その生産関係の発展としての唯物史観を確立した。すなわち資本主義的生産様式にある矛盾は、社会主義的生産様式を階級闘争を経て必然的に導き出すものと考え、その完全なる社会主義的生産様式こそが、真に

人間を解放し得ると考えた。この点だけは依然として今日でも正しいと思う。

利潤を追求する資本主義は、やがて帝国主義への道を辿り、戦争への危機をつねにはらむものである。第一次欧州大戦、第二次世界大戦はいずれも資本主義の矛盾から起きている。そして第二次世界大戦は、まず世界経済の一環としての日本資本主義の矛盾が、軍国主義の抬頭を呼び中国侵略への道を開始させた。このこととこれにつづくナチスの抬頭は、日独伊三国同盟となつて、英米ソを包む世界大戦に発展したのである。

私は満洲事変直前から、大戦開始までこうした帝国主義戦争反対とその回避のため、まず中国共産党の領導の下に、そして次には社会主義陣営を防衛する意味において、コミンテルンの影響下で反戦のための情報活動を、中国大陸を舞台として闘つたのである。今日、日本資本主義は米国の朝鮮戦争への介入、およびそのベトナム侵略戦争の間隙に乗じて敗戦直後の壊滅状態から立ち直り、世界における総生産量第二位の資本主義国となった。しかし、戦後殖民地を失い、すべての原料資源を海外に依存しなければならない日本資本主義は、軍国主義へ傾斜する危険性を多分に内包している。かつてのナチスドイツのそのように――。

私があえて三十数年以前における反戦反ファシズム闘争としての私の約十年にわたる闘いを回想した『或る革命家の回想』（昭和二十八年刊）の改訂版を今日決意するにいたつたのも、いまだ世界には米国、日本をはじめとする多くの資本主義国があり、世界には依然として戦争の危機が内在しているからである。今日露呈しはじめた日米間の経済的矛盾も、そして、また中ソにおける社会主義国家間の対立も、今日、世界になお多くの資本主義国が現存

する、前者はその矛盾と、後者はその矛盾の反作用として起きつつあると私はみるのである。戦争の危機はつねにいたるところに内在している。それは戦後独立をかちとった多くの後進国を含めて、それが何時日本を捲き込む世界大戦の導火線となるかも予見を許さぬのである。ただ良識ある各国の指導者の英知のみが今日辛うじて戦争への道を回避しているのに過ぎない。

私はかつてこの『ある革命家の回想』を書くに当って、教条主義的なマルクス主義者としての人間像を描くことを避け、マルクス主義のなかにヒューマニズムを見出して戦った同志の人間像を、ことに尾崎秀実と私との人間関係を主として表現するために書いたのである。実践にとってなによりも大切なのは、とかくセクトを生む観念的な論理よりも、具体的な人間関係であり、その同志愛である。公式的なマルクス主義者の欠点は、ともすれば抽象論に捉われて、観念的に同志を、マルクス・レーニン主義の熟語をもって規定し、誹謗してしまふことである。かれらは人間はその誠ある働きかけによつては変化するものであるということを忘れてゐる。それは心の問題である。環境は心を変えるが、心はまた環境を変える。私がこの回想のなかで保守的な人々の人間像をもあえて愛情をもつて描いたのも、一つはそうした教条主義的なマルクス主義者に反感を持ったからである。

真理はつねに相対的である。しかし現時点ではマルクス主義はなお多くの真理をわれわれに提供してくれる。この回想はゾルゲ事件の一断面を物語つたものであるけれど、私のこの若き日のマルクス主義者としての回想が、現代の若き革命家たちになんらかの参考となれば、これ

に越した喜びはない。

昭和四十八年三月一日

著
者

目次

はじめに 3

第十一章 日本の破局近づく 506

第一章 一九三〇年前後の上海 9

第十二章 獄中 531

第二章 満洲事変とコミンテルン 43

おわりに 536

第三章 嵐吹く満洲 88

解説 尾崎秀樹 539

第四章 上海事変 141

第五章 黄浦江の波濤 181

第六章 祖国日本 233

第七章 華北から満洲へ 266

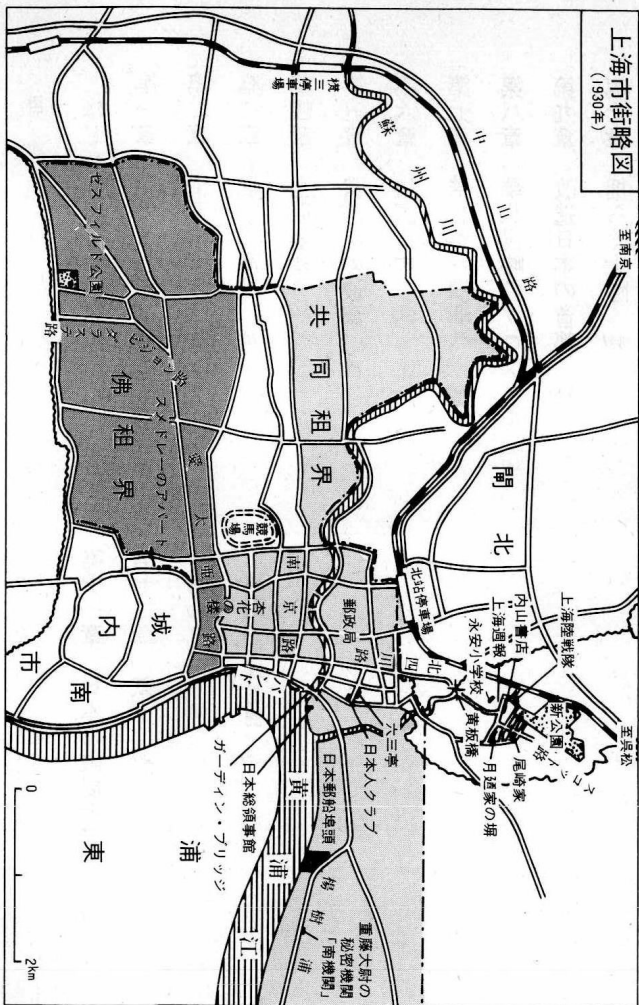
第八章 華北侵略のプロファイル 331

第九章 改造日本の首都 408

第十章 揺らぐ大陸 450

上海市街略図

(1930年)



第一章 一九三〇年前後の上海

日支闘争同盟

上海北四川路の北の端、日本海軍陸戦隊の建物の前の道路への丁字型に突き当たっているアスファルトの狄思威路が、夜闇の中を蛭のように延びて黒く光っている。この街道をたつたいま、鉄兜と弾帯と拳銃で武装した工部局の英国人やインド人の巡捕がトラックに乗って疾走して行った。時は一九三〇年十一月七日——李立三コース下の深夜の上海である。この道路に沿って日本の料亭月廬家花壇の長い塀が深沈として続いている。この塀の前を毎朝、日本の陸戦隊の兵士隊が演習のために運ばれていくのである。いまこの塀に、二つの黒い影がピタリとヤモリのようにくっついていている。しばらくすると反対側の樹間の闇の中で、煙草の火が大きく空間に円を描いて投げ棄てられた。と同時に、この塀の右端と左端に立っていた黒い人影が、同じように煙草の火を左右に振った。瞬間、塀に張りついていた二つの影が急速に運動をはじめた。塀には半身大の大きさの文字がコールタールで素晴らしい速さで書かれてゆく。

日本帝國主義を倒せ

中国のソビエトと手を握れ

銃を逆にして資本家 地主の国家を倒せ

中国共産党 万歳

兵士 労働者 農民 万歳

日支闘争同盟

これだけの文字を書き終わってホッとしているのは同志手島博俊と西里竜夫である。最初に煙草の火を振った長身の男は小松重雄であり、左右のピケに立ったのは同志副島竜起と岩崎竹二である。私は手島と西里の背後に立って前後左右に気を配りながらこれを見ていた。仕事は終わった。私は静かに煙草の火をつけた。これは前方と左右の同志に完了をしらせるための約束の合図である……この間約十分……同志は四方に散った。手島と西里は、手袋とコールタールの缶と刷毛とを塀の内側へ投げこむなり、そのまま了すと闇の中へ姿を消した。私は同志全部が視界から消え去るのを見とどけてから、ゆっくり塀に沿って歩き出した。とたんに武装巡捕のトラックがヘッドライトを照らしながら闇の中から現われて通り過ぎていった。

彼らは革命記念日の前夜に備えて警戒のために走り回っているのである。塀の終わったところで横へ折れると、そこには同志嘉久が、乗客をよそおって蠅のように群がってくる夜の黄包子を集めて一方に誘導している。彼は黄包子を現場に近づけないように苦心しているのだ。嘉久は長身の美男子だ。私を見ると、微笑をたたえて私と肩を並べ、静かに歩を運びながら、

「この先は中国街で、現行犯を追跡する以外には共同租界の警官はいれないのです」といって、その中国街へはいっていった。嘉久はそこで黄包子を呼び、ゆっくりと俥に乗って暗の中へ消えて行つた。私も次第に興奮から冷めながら、俥を呼んだ。

昨夜は陸戦隊の兵舎に伝単を投げこんだが、その時は西里が恋人の娘と歩哨の前で露骨なアベック振りを見せて若い兵士の注意を奪い、その隙に私と小松とで素早く営内に伝単を投げこんだ。伝単はもちろん日本文の反戦ビラである。昨夜は四人だったので簡単に事は運べたが今夜は大勢で組織的に行動したのでずいぶん氣を使った……私は俥を走らせて夜更けの風にあたりながらそんなことを考えていた。

きょうは長沙暴動から三カ月目の上海の革命記念日の前夜だ。氣のせいかどこかで銃声が聞こえたような氣がした。

日支闘争同盟は、今年の七月、上海週報の同人田中忠夫、中国社会科学者連盟の王学文などを中心とする読書会を母体として発展した実践団体である。この読書会は当時の左翼翻訳家温盛光の北四川路永安里の寓居を根城にしていた。集まるものは王学文、温盛光、田中忠夫、西里竜夫、船越寿雄、安斎庫治、白井行幸、手島博俊、小松重雄、副島竜起、岩橋竹二、水野成、川合貞吉などである。このうち安斎と水野は東亜同文書院の学生であつた。彼らは別に学校内に浜津良勝、河村好雄、中西功（戦後共産党から出て参議院議員になったが極左的偏向のために除名さる）らと社会科学研究会を持ち、中国共産党の細胞に所屬していた。岩橋と船越は上海

毎日の記者、西里は上海日報の記者、小松は満鉄社員、川合は上海週報で筆をとっていた。そして手島と副島はいわゆる浪人であった。

この読書会は、理論的な指導を王学文がやり、具体的な中国の政治経済の諸問題の解明は田中忠夫がやった。しかし田中忠夫と温盛光は、激しい弾圧を怖れてか、文筆活動以外に出ず、後には実践活動から落伍した。

八月の終わり頃のある日、同志王学文は、この会合に中国外兵委員会に属していると称する台湾人の楊某を紹介した。

在上海の日本を除く列国駐屯軍隊の外国兵の中には反戦団体の組織があつて、中国共産党の指揮下に入り、外兵委員会が直接これを指導していた。楊はこの外兵委員会に所属していて、別の名を劉とも蘇ともいっていた。

楊は、この会合ではいつも流暢な日本語で積極的に自己の見解を述べ、むしろ温厚な王学文を圧倒した。王学文は山東省の生まれ、河上肇の弟子で日本の京大出身であつた。彼の弟は国民党のために殺されているので、蔣介石に対する恨みは、階級的憎悪ばかりでなく、肉親の情愛からくる憎悪でもあつたように見受けられた。のち、彼は延安に赴き、マルクス・エンゲルス学院の校長になった。

楊は、十月中旬のある日の読書会の席上で、

「マルクス主義者は研究し、組織し、実践しなければならぬ。この三者の關係は不可分であつて、弁証法的に相関連し、統一し、発展するものである。単なる研究は机上のマスターベー

シヨンに過ぎない」

という意味のことを述べてアジった。楊の強烈なアジテーションに、まず純真な副島は顔を硬直させて実践の決意を固め、手島もまたこれに同意を示し、西里などは待ってましたとばかり勇躍した。このような空気が自然に温、田中、船越らの消極分子を脱落させ、残りのもので実践団体たる日支闘争同盟を組織した。参加したのは、小松重雄、副島竜起、西里竜夫、嘉久某、川合貞吉、手島博俊、王学文、楊某と、後に王学文の紹介で加わった反帝の姜某であった。姜は別名を陳伍とも楊柳青ともいったが本名は蔣某であった。姜は陸豊、海豊の暴動に参加した経験をもち、爆弾を持って海豊の刑務所を破壊した時の思い出話は彼のオハコであった。

この団体は、実践活動に入るに先立ち、まずこの団体をいかなる中共の組織下に置くべきかについて中国側同志から意見を求められた。中国反帝同盟と中国外兵委員会と中国社会科学者連盟があり、そのいずれに所属すべきかに同志は迷った。

九月の上海は暑かった。昼は道路のアスファルトが熔けて、黄包子のタイヤがねちねちと鳥モチのようにねばりつき、車夫は全身を汗にして街頭を走っていた。夜の新公園では、若いアメリカかぶれの中国の男女が夏草の上で恋を楽しんでた。祖国を追われたホワイトのロスケがこれらランデヴーの男女にまつわりついて喜捨を強要していた。このような上海ではあるが、一方には長沙革命のあおりを受けて、一触即発の緊迫した空気も漂い、純真な青年たちは革命の火の中へ身を投げていった。そして革命のスローガンと伝單が街を埋めていた。八月一日以来、中国共産党の機関紙「紅旗」は日刊となり、来る日も来る日も国内革命の昂揚を煽っている。

た。

実践団体として日支闘争同盟は、この緊迫した空気と重苦しい風雲とを前にして、もはや躊躇遷延を許さない気分になっていった。九月下旬、フランス租界のホテルの一室で持った会合の席上、楊はその小柄な体軀と浅黒い精悍な顔に闘志を漲らせていった。

「今日はどうかあつても所属団体を決定したいと思います」

次いで、

「各同志は履歴書を出してください」

私と小松は、前から中国側の団体に多くのスパイが入りこんでいることを聞いていたので、履歴書の問題にはいささか躊躇を感じた。

小松重雄は信州の生まれ、陸士出である。士官学校在学時代から北一輝の思想に興味を持ち、一輝の家にも出入りしていた。任官してから朝鮮の羅南の連隊に赴任したが、大正天皇の死去の際、その追悼式に出席せず兵士を集め祝酒を挙げたという事件を起こして退官させられ、尾行をつけたまま満洲に入り込んで、当時の青年らしく馬賊になろうとしたが成功しなかった。小松が羅南を船で発つとき見送ったのが二・二六事件の大蔵栄一大尉である。やむを得ず奉天で饅頭屋をやったり、旅順で米屋の番頭になったりしたあげく北京に流れて来て、当時内務事務官として北京で中国共産党の調査をしていた安部源基に拾われて孫文主義を研究していたが、結局マルクス主義にはいり、安部が帰国してから後任者と衝突して北京を去り、橘樸の紹介で南京で満鉄に入り、更に上海へ流れて来た男である。重厚で人情味の豊かな一種のロマン

チストである。私も副島も彼には非常に世話になった。(ウイロビー報告書には小林茂雄となっているが、この小松重雄の誤りである)

楊の言葉に、しばらく考えていた小松は、やがて口を開いて、

「履歴書の提出についての同志楊君の発言はもつともだと思えますが——しかし、中国側の反帝諸団体の中には多くの帝国主義国や国民党のスパイがはいっていると僕は聞いている。したがってまだ全面的には信頼し得ない現状だと思うので、そのことは当分保留させていたいただきたい。また日支闘争同盟がいずれの団体の命令下に入ることも保留させていたいただきたい。それは日本側の事情に暗い中国側による観念的な指令は危険だと思うからです」

と、意外なほど強い口調でいった。楊の表情にはチラと不快そうな翳^{かげ}が走ったが、しかし、彼もまた強腰で、

「いや、共産主義の活動はその所在する国の党の指揮下に属するのが原則です。われわれはその原則をはずれることはできない。ですから是非とも今日は所属団体を決定していただきたい」

といい張った。

川合、副島、手島らは小松の主張を支持した。その気まずい空気も結局王学文のとりなしで、行動は日支闘争同盟自身の団体の決定によって行ない、指導は外兵委員会と反帝同盟の両者から受けることで妥協した。王学文は反帝同盟との連絡者となり、楊は外兵委の連絡にあたることになった。